

敏さんの「とっておき話」

たくさんの人に見てもらいたいから、「石」だった。

「藝大にはいった頃は、最初は彫塑からはいったのだけれど、僕はたくさんの人に作品を見てもらいたかった。できるだけ閉ざされた空間でなく、野外に、広いところに作品を置きたいと思ってね。ところが風雨に耐えるブロンズだと1体つくるのに100万円もかかる。そんなお金はないし、だから自然と石になった。でも当時は石を彫るひとなんていなかったから、師匠もなしですべて独学でした。」

機械が嫌いだから、ひたすら手で石を削ってきた。

石を彫るには、右手にハンマーを持って左手の鑿(のみ)をたたき、最初はひたすら原石を荒削りしていく。ときには重いハンマーをつかって3トンの原石の半分を削り取ることも。「初めて1キロのハンマーを手にするると重くて2、3週間は手に豆をつくるけれど、その状態を過ぎてしまえば、手も固まって楽に仕事ができる。だから誰でも最初はゆっくり手をならすことから始まります。まあ、2キロのハンマーで夢中になって1日10時間も彫り続けると、しまいに指がかたまってしまって、1本1本、柄からはずさなきゃならないこともあ



スペイン製のヘッドに野球の硬式バットを柄に利用した、敏さんオリジナルのハンマーと鑿。

たけどね(笑)」。しかも当時、鑿はすべて手づくりだった。コークスを燃やし、鉄をたたいて作品に合う鑿をつくる。ようやく50本の鑿をつくっても1日で20本つぶしたこともあったそう。機械を使わず、ひとのみ、ひとのみを大切に掘るから、ひとつの作品ができあがるまでには数か月もかかる。それが敏さんの仕事。

谷保天満宮の「座牛」は、触るためにある。

国立市内で最初に登場した敏さんの作品は、谷保天満宮の階段を降りたところにある『座牛』(アンデス産の黒御影石。1973年)。「菅原道真が亡くなったときに悲しみのあまり動かなくなった、という牛だから、僕は実際に牛をあちこちスケッチして観察し、梃子でも動かなくなった牛は鼻面を前に突出した姿勢だと思った。座牛の背筋は遠い山の峰に見立て、裾野には天神さんが見守る谷保の村落。そしてその鼻を台座から10センチ前を出して、お参りする人が誰でも触っていいようにしたんです」。そう、だから今、牛さんの鼻のアタマは敏さんの思い通りピカピカに。

石の材料を選ぶには、ひとつひとつ理由がある。

「野外に置くってことは、とがったものや人に危害を加える恐れがあるものはダメだし、天候や温度変化にも耐えるものでなくてはならない。だから置かれる場所や目的によって石の材料を選びます」例えば、先の座牛は風雨に耐える黒御影石だが、芸小ホールの前に置かれている2つの作品「虚空」の材料は、水を吸収しやすいイタリアの大理石。雨にぬれ続けると黒くなってしまおうので、屋根の下に置かれている。70年にわたり、さまざまな石と対話しながら、石を彫り続けてきた関敏さん。最近では旅のスケッチ画の個展も市内で開かれてきた。

小さな硯に篆刻(てんこく)、スケッチも。

敏さんは大きなものばかりではなく、同じく石を素材とした硯、鉄やブロンズの文鎮など、小さな文房具も制作している。さらに「篆刻」に興味をもち、中国には研鑽もかねて蘇州からタクラマカン砂漠の西まで10数回も旅をしたそう。



硯(2003年)

その中国やヨーロッパを旅した時の思い出は、たくさんスケッチになって、地元の展覧会を飾ってきた。そういえば「子どものとき、絵を描くのが好きだった」のが、石彫家としての原点でもあるらしい。

70年にわたる一人の芸術家の軌跡、作品を通してどうぞお楽しみください。



アトリエにて(2017年)

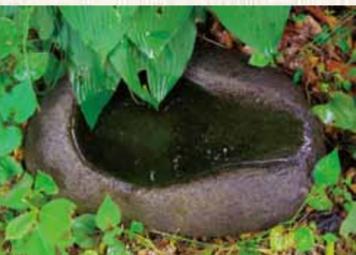
他にも個人蔵(非公開)含め50点以上の作品が国立にあります



●多摩川 日野の渡し碑
アフリカ黒御影石 1986年
(立川市錦町 市下水処理場わき)

川の対岸を、そして過去と現在をつなぐ“舟”に“月”をアレンジしたフォルム。自然と共に生きた先人たちへの敬意を込めて。黒御影石は風雨に強く、風化しにくい。

●水盤 御影石



●風花
ドイツ花崗岩 1995年
風化して、全てが化石のようになってしまったイメージ。一つの石材を削り、上部だけ5種類の砥石を使って手で磨いてつやを出した。(明窓浄机館所蔵。公開は不定期)



●虚空
稲田石 1972年
稲田石は、茨城県から産出する花崗岩。



●地蔵尊像
本小松石 1976年

●曲水 本小松石 1982年
遊び心満載な、L字形水路のオブジェ。周囲の草木に水を与える役割も兼ねている。本小松石は、神奈川県真鶴から産出する安山岩(火山岩の一種)。



●風紋
ドイツ花崗岩 1994年

●是従南甲州街道
真壁石 1993年



●馬頭観音
小松石 2002年



●鎌倉の海100周年記念碑「波動」
アフリカ黒御影石 1983年(鎌倉市 由比ヶ浜)

鎌倉の800年の年輪と波紋の襲を重ね、波のように拡がる未来への願いを込めた。中心部の穴は、太陽を吸収する円、風を感じる間。若宮大路の突き当りから200mほど西の海岸沿いにある。

●礎(いしづえ)
インド黒御影石 1980年
37年にわたりJR八王子駅前に置かれていたが移設中。新しい設置場所未定。



市外でも見られる関敏作品

●風紋
ドイツ御影石 1993年
(立川市 幸福社会館)

中国・新疆ウイグル自治区で見た、ダイナミックに変貌する砂丘の表情をイメージ。



●地蔵尊像
小松石 1992年(立川市 流泉寺)

頭部と宝珠だけを磨いてある。境内の五百羅漢の一体目も敏さんの作品とか。
※境内では静かにご鑑賞ください



関敏氏年表 1930~

- 1930 東京都国立市に生まれる
- 1951 東京藝術大学美術学部彫刻科 平櫛田中教室彫塑に入学
- 1956 東京藝術大学 卒業
- 1957 彫刻3人展(江口遇・湯原和夫・関敏) 銀座ときわ画廊

- 1963~65,67 個展(日本橋 秋山画廊)
- 1967 「札幌建設の地」100周年記念碑「指月」制作
- 1968 霞ヶ関ビル35階東京会館 「水煙」(ブロンズ彫刻)制作
- 1972 個展(国立 谷保天満宮梅林)
- 1973 国立 谷保天満宮「座牛」制作
- 1974 個展(八王子 大丸)
- 1976 個展(立川 たましんギャラリー)
- 1977 第3回彫刻の森美術館大賞展
- 1978 国立 谷保天満宮「和魂漢才碑」制作
- 1979 国立駅南口ロータリー時計塔 制作/個展(福山 イマヰ画廊)
- 1980 第3回八王子国際彫刻シンポジウム参加
- 1981 国立 谷保天満宮「原田重久先生句碑」制作 個展(虎ノ門 愛宕山画廊)/個展(国立 画廊岳)

- 1982 立川 流泉寺「地藏尊」制作
- 1983 鎌倉の海100周年記念碑「波動」制作 個展(虎ノ門 愛宕山画廊)
- 1984 個展(国立 画廊岳)/関敏スケッチ展(小平 一ツ橋画廊)
- 1985 国立 南養寺「弁財天像」制作 7人による彫刻小品展(国立 画廊岳)

- 1987 くになち市民芸術小ホール「襲」制作 エソラ開廊記念展(国立 エソラギャラリー)
- 1989 関敏展(銀座 愛宕山画廊)
- 1990 関敏作品展(国立 画廊岳)
- 1991 関敏パステル画展(国立 ギャラリーエソラ) 関敏展一襲から裂へー(銀座 愛宕山画廊)
- 1992 関敏マケットと小品展(国立 画廊岳)
- 1993 立川市 幸福社会館「風紋」制作 東京女子体育大学「輪舞(Rond)」制作 バリ島スケッチ展(国立 ギャラリーエソラ)

- 1994 関敏展一石彫・風紋一(銀座 愛宕山画廊)
- 1995 関敏ヨーロッパスケッチ展(国立 画廊岳) 関敏展(あきる野 綜藝舎ギャラリー) 描かれた国立=まち=人=自然=くになち郷土文化館開館1周年 特別展(くになち郷土文化館)
- 1997 国立 谷保天満宮「山口瞳先生文学碑」制作 関敏展(あきる野 綜藝舎ギャラリー) くになち美術展(くになち郷土文化館) 関敏文具展(国立 ギャラリーコロム)
- 1998 関敏展一石に聴くー(国立 たましん歴史・美術館) 関敏文具展(国立 ギャラリーコロム) 関敏展(国立 ギャラリーコロム)
- 1999 関敏展(国立 ギャラリーコロム)
- 2000 『石に聴く 石を彫る』(里文出版)出版
- 2001 関敏展(国立 ギャラリーコロム)
- 2003 関敏彫刻展(国立 画廊岳)
- 2004 絵と文具展(国立 ギャラリーコロム)
- 2006 関敏彫刻展(国立 画廊岳)
- 2007 関敏展(国立 ギャラリーコロム)
- 2009 硯と葉書絵展(国立 ギャラリーコロム)
- 2010 関敏展(国立 画廊岳)
- 2012 関敏展(国立 画廊岳) 関敏小品展一秋ー(国立 ギャラリーピブリア)
- 2013 関敏展「スケッチの思い出」(国立 画廊岳)
- 2017 関敏スケッチ展(国立 画廊岳)



まるまる 槐樹(えんじゆ) 1957年 (中野区 宝仙寺) 木彫の初期作品(非公開)



「関敏 石に聴く」 1998年 (たましん歴史・美術館) くになち中央図書館、郷土文化館資料室で閲覧可能。



「石に聴く 石を用る」 2000年(里文出版)

(このほか、展覧会多数)

国立市市制施行50周年記念 (公財)くになち文化・スポーツ振興財団設立30周年記念事業 2017年12月 第1版発行

[協力]株式会社 せきや [制作]国立歩記事業部(本誌のロゴは関敏氏制作)